老人ホームの老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究

藤原武弘・来嶋和美

広島大学総合科学部情報行動科学教室

（1988年10月31日受理）

Survey on the loneliness and social network of the aged who live at an old man's home

Takehiro FUJIHARA and Kazumi KIJIMA

Abstract

Investigated the degree of loneliness and the structure of social network in the aged who live at an old man's home. One hundred eighty three aged above 65 years were interviewed concerning perception of loneliness and social network and background variables. Results showed that the score of loneliness was higher than it, which had been before examined for the aged who live alone. Loneliness was associated with the number of social supporters. The degree of loneliness was lower when subjects had many supporters. However, background variables (marital status, health status, activity level, etc.) were not related to loneliness.

個々人の生活は，一連の役割の体系の変化や移行（transition）によって特徴づけられると考えられる。Rosow（1974）は，老年期への移行の危機的な特徴として3つを指摘している。

1．通過儀礼の欠如。通過儀礼は主としてライフ・サイクルの早い時期に生じ，晩年にはフォーマルな通過儀礼はめったにみられない。例外的な通過儀礼は，退職，配偶者との死別，特殊施設への収容といったものである。しかし一般的には何かの出来事や変化があって老年期に入っていくというより，知らず知らずのうちに老人になったり，老年期であることを知らされる。

2．社会的喪失。人生の主要な仕事は基本的には完了し責任は軽くなるが依存の度合は増大する。配偶者に先立たれたり，退職することにより重要な社会的役割から遠ざけられる。これらの喪失，およびこれに対応して生じる依存，孤立，モラールの低下等が老年期には増大する。

3．役割の不連続性。特に男性にとっては，老年期への移行は役割の不連続性によって特徴づけられている。老人は自分たちの経験から学ばなければならないし，自力で適応していかねばならない。文化というものは，老年期への移行に際してほとんど助けにもならないし，老人が初めて出会う問題の助けにもならない。

このように老年期に入ると，役割の移行に対する適応といった困難な側面に老人は遭遇すると考えられる。例えば，長田・原・荻原・井上（1981）は老年期を社会的孤立に陥りやすい時期と捉えており，社会的孤立のネガティブな側面として孤独を心理学的に研究している。

加齢化とともに老人は孤立してゆき，孤独感が高まると一般には考えられるが，従来の研究は必ずしもこの考えを実証してはいない。このことは Peplau ら（1982）の指摘，「老人＝独居＝孤独」の三段論法が誤ったという主張とも一致している。つまり，高齢になると一人暮らしをする者の割合は増大するが，一人暮らしによって孤独感は高まるという説を裏づける実証的資料はほとんどないというのが Peplau らの指摘である。

わが国においても同様に，一般に思われているほど老人は孤独ではないという調査結果が得られている。たとえば，工藤・長田・下村（1984）は，改訂版 UCLA 孤独感尺度を用いて老人大学の受講者を対象に調査し，孤独感，孤独に対する類似型な対処行動，感情反応を明らかにした。その結果，予想外に孤独感が低いこと，また対処行動や感情反応に性差が見られるなど興味深い事実を見出している。

また総務庁長官官房老人対策室（1987）の国際比較調査結果によると，さびしさを感じることが「全くない」への比率が最も高く，71.3％を占めることを見出している。藤原・来嶋・神山・黒川（1987）は，65 歳以上の独居老人を対象とした調査で，6 項目の UCLA 尺度すべてに孤独感を感じないと反応した割合が 65.2％を占めており，独居老人の孤独感がそれほど強くないことが見出されている。

孤独感そのものを調査したわけではないが，金子（1987）は都市高齢者の社会的ネットワークと生きがいとの関係を調査して，「老いと孤独」の命題は一般的には成立しないことを明らかにしている。

とはいっても Peplau ら（1982）が指摘するように，大多数の老人が自分の社会的関係に満足し，孤独感を抱いていないといっても，何人かの老人は孤独感という苦痛な感情を味わっている。従って，孤独感に影響を及ぼす要因や変数を明らかにすることで，孤独に対処するための方途を探ることは，高齢化社会の到来とともに絶対的な老年人口の増大が予測されるだけに，重大な問題のように思われる。

孤独感はどのような要因や変数と関係しているであろうか。このような変数の影響を知ることで，孤独感を感じている老人への対処のための情報が期待できよう。長田・原・荻原・井上（1981）は，老人ホーム在園の老人を対象として孤独感を心理学的に研究した。孤独に対する自己認知と孤独感としての寂しさを調査した結果，女性の方が男性よりも孤立認知が無いという割合が高いことを見出している。また，友人と実子の有無が孤立認知と孤独感に関係を検討し，友人の有るものは，孤立認知と孤独感が低いことを明らかにしている。同様に Arling（1976），Perlman, Gerson & Spinner（1978）や Mullins, Johnson, & Andersson（1987）も友人関係と孤独感の間に関係を見出しており，友人がいる場合に孤独感が低いことを明らかにしている。

Creecy, Berg & Wrigt（1985）は，孤独感に影響をおよぼす要因をパス解析によって明らかにした。彼らの結果によれば，孤独感に影響を及ぼす強力な変数は社会的成就（Social fulfilment）つまり社会的な活動や他者との相互作用における個人的なインボルブメントの質である。

彼らは孤独感は個人の通常の援助システム内から生じる欠如つまり関係性における欠如から生じると考えている。こうした欠如の源泉は，配偶者の喪失，収入の喪失，健康やヴァイタリティの喪失といった，老年期への移行に伴って生じる喪失の中に見出されるかも知れない。

総務庁長官官房老人対策室（1987）の国際比較調査結果によると，孤独感に影響を与える要因として，婚姻上の地位と家族構成が指摘され，離婚者や死別者そして単独世帯の者に孤独感が高いことを明らかにしている。

藤原・来嶋・神山・黒川（1987）は，65歳以上の独居老人を対象とした調査で，危機事態において依存が可能な，中核的なソーシャルネットワークを持つ人は，そうしたソーシャルネットワークを持たない人に比べて孤独感がそれほど強くないこと，またソーシャルネットワークの大きさと孤独感との間には一定の関係が見られ，ソーシャルネットワークの大きい老人は孤独感が低いことを見出している。

社会的ネットワークとは，通常，集団や組織等の範域に限定されない人間関係の拡がりや網の目を指すが，われわれの用いる社会的ネットワークはより狭い範囲の人間関係の網の目に限定している。危機的な事態においてとりわけ依存が可能で，しかも危機事態におけるストレスの緩衝帯となりえるような，いわば中核的な社会的ネットワークを指している。また，情緒，物質，情報，社交といった面での，社会的な支持や援助が関係性の中に含まれているし，危機的な事態においてはそのような支持や援助が期待可能な，社会的ネットワークを意味している。こうした社会的ネットワークへの概念化はコンボイ・システムとしての社会的ネットワークの概念に類似している。

Kahn と Antonucci（1981）は加齢にともなう役割移行や役割喪失などによって生じるストレスに対処して行くにあたって，個人をまわりから支える社会的援助システム（social support system）が重要であることを指摘している。こうした援助システムは，個人の社会的ネットワークを基礎に形成され，それはさながら，大海の航路をともに歩んでいく護衛艦（コンボイ）にもたとえられている。カーンらのコンボイ・システムは，三つの層より成り立っている。円の中心部の層は，1．長期的で安定した役割に影響を受けないコンボイ・メンバーが位置している（例えば，配偶者や親友）。その外側には，2．やや役割に関連しており時間の経過に伴い変化しやすいコンボイ・メンバー（例えば，親戚や友人），更に一番外側のサークルには，3．役割関係に直接的に結び付いており，役割変化に最も影響を受けやすいコンボイ・メンバー（例えば，同僚や上司，遠い親戚）が位置している。

われわれが明らかにしようとしている社会的ネットワークの概念は，Kahn と Antonucci（1981）のコンボイ・メンバーのうちで最も重要度の高い，長期的で安定し役割に影響を受けないコンボイ・メンバーに対応している。

本研究の目的は，藤原ら（1987）が独居老人を対象に行った結果と比較しながら，老人ホームに入居している老人の孤独感と社会的ネットワークを明らかにすることにある。老人ホームの老人を対象としたのは，老人ホームへの入居は Rosow の指摘する通過儀礼であり，一種の移行事態でもある。独居老人を対象とした調査において，予想外に孤独感が低いことが見出されたが，施設に入居しているという老人の孤独感はどのようなものであろうか。また孤独感に影響する重要な要因として社会的ネットワークの有無が独居老人を対象とした調査で明らかになったが，果たして老人ホームの老人の場合は同様の結果が得られるであろうか。更に，本研究においては，社会的サポート・システムと孤独感との関係についても検討を行う予定である。

方　　法

被調査者：広島市内の4ヶ所（特別養護老人ホーム1ヶ所，養護老人ホーム2ヶ所，軽費老人ホーム1ヶ所）と岡山県の1ヶ所の老人ホーム（軽費老人ホーム）で65歳以上の老人183名（男性64名，女性119名）を対象とした。平均年齢は78.0歳であった。

調査方法：63名は面接法で，120名は留置調査法により回収した。本調査は昭和63年7月12日から8月27日までの期間に行なわれた。

調査内容：孤独感尺度は，工藤・西川（1983）の孤独感尺度から6項目を選定し，「決して感じない」「めったに感じない」「時々感じる」「しばしば感じる」の4段階で評定させた。社会的ネットワークに関する具体的項目は子供及び頼りになる人の有無，人数，頼りになる人の中で特に頼りになる2人の人いわば中核的社会的サポーターそれぞれについて年齢・性別・間柄・連絡手段・連絡回数・居住地・社会的サポートの要素（社交的側面・物質的側面・情動的側面・情報的側面）・社会的サポーターへの満足度からなっている。社会的サポートの要素はBarrera & Ainlay（1983）をもとに大学生を対象とした予備調査で因子分析をした結果をもとに，8項目を選定し4段階で評定させた。さらに孤独感に影響を与えると思われる要因として，被調査者の性・年齢・老人ホームの入居年齢・学歴・持病の有無・受診状況・日常生活動作能力（古谷野ら（1987）のADL尺度）・配偶者の有無・配偶者が死亡してからの年数・職業経験の有無・退職後の年数・こずかいの有無と金額・親しい間柄への願望・新しい友人への願望についても調べた。

結　　果

1．社会的ネットワーク

（社会的サポーターとの間柄・年齢・連絡手段・居住地）

老人ホームの老人183名の中で，社会的サポーターが存在する者は74.9％（137名）であった。社会的サポーターの量的側面をみると，サポーターの人数は1人と答えた人は30.1％（55名），2人と答えた人は21.3％（39名），3人と答えた人は12.6％（23名）であった。さらに4人から最高10人まで社会的サポーターの人数が挙げられたがそれらはいずれも5％

老人ホーム		独居老人	
学校が同じ	0.5%(1)	学校が同じ	3.2%(30)
自分の親戚	84.6%(181)	自分の親戚	58.5%(533)
配偶者の親戚	3.3%(7)	配偶者の親戚	4.6%(43)
勤めが同じ	0.5%(1)	勤めが同じ	2.2%(21)
異性の友人	2.8%(6)	異性の友人	0.1%(1)
近所の人	2.3%(5)	近所の人	19.6%(185)
その他	3.3%(7)	その他	11.8%(112)
配偶者	2.8%(6)	合計	945
合計	214		

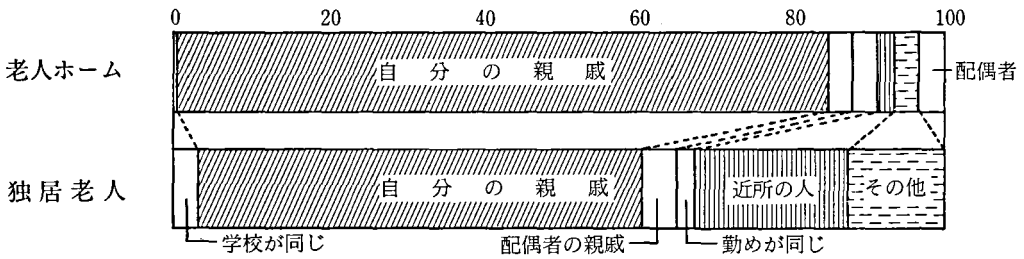

Fig.1. 社会的サポーターの内容

以下であった。社会的サポーターの平均人数は1.70人で，男女別にみると男性の平均は1.94人（SD 1.82），女性の平均は1.57人（SD 1.66）で統計的に有意な差は見出せなかった。

次に社会的サポーターとの間柄の内訳を示したものがFig.1である。自分の親戚が最も多く84.6％（181名），そのうち子供の割合は48.6％（104名）で全体の約半数を占めている。子供以外の自分の親戚（兄弟，姉妹，甥，姪など）は36.0％（77名）であった。その他の間柄はいずれも5％以下であった。入居年数は3年未満と3年以上で最も頼りになる人の間柄を調べたところ，3年未満では子供と自分の親戚が多く合わせて81.6％（31名），同様に3年以上も子供と自分の親戚をあげた人が90.8％（69名）であった。社会的サポーターとの間柄を独居老人とホーム老人で比べてみると，独居老人の場合（藤原ら（1987）），自分の親戚を挙げた人の割合は58.5％（533名）でホーム老人の割合（84.6％）より少なかった。独居老人の社会的サポーターの間柄で2番目に多かったのは近所の人で，その割合は19.6％（185名）であった。社会的サポーターとの間柄を，自分の親戚とそれ以外に分けて独居老人とホーム老人で比較すると，上述のようにホーム老人の方が自分の親戚が社会的サポーターになる割合が有意に高かった（x^2=51.0，df＝1，p＜.001）。

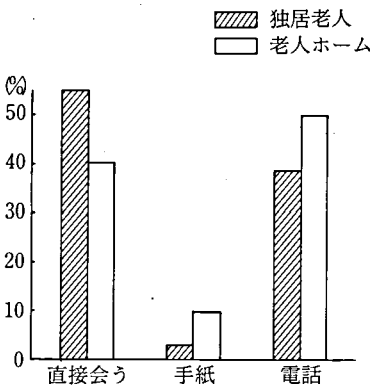

Fig.2. 社会的サポーターとの連絡手段

社会的サポーターとの連絡手段を表わしたものがFig.2である。ホーム老人の場合，連絡手段として最も多いものは「電話」の50.0％（107名）で，その次が「直接会う」の40.2％（86名）であった。独居とホームで連絡手段を比較してみると，独居老人の場合直接会う割

老人ホーム		独居老人	
町内	17.3%(37)	町内	34.5%(326)
市内	38.8%(83)	市内	41.8%(395)
県内	23.8%(51)	県内	9.7%(92)
県外	19.6%(42)	県外	12.5%(118)
海外	0.5%(1)	海外	0.2%(2)
合計	214	回答なし	1.3%(12)
		合計	945

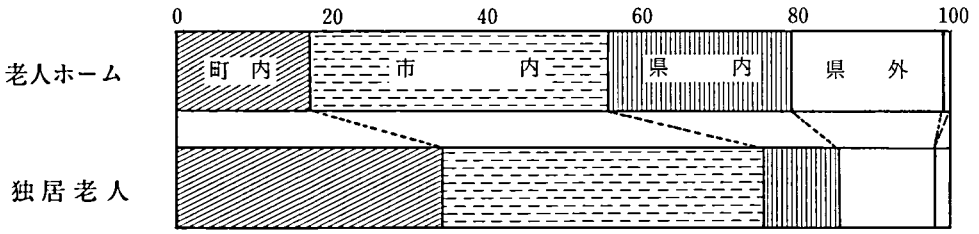

Fig.3. 社会的サポーターの居住地

合は54.9％でホーム老人の40.2％に比べると有意に高かった（$x^2=19.5$, $df=1$, $p<.001$）。

次に独居老人の場合とホーム老人の社会的サポーターの居住地を比較すると，Fig.3に示したように独居では社会的サポーターの76.3％が町内・市内に住んでいるのに対して，ホームの場合社会的サポーターの居住地が町内・市内の割合は56.1％であった。（$x^2=40.0$, $df=1$, $p<.001$）。以上のことから独居の場合，社会的サポーターは自分の親戚以外に近所の人も挙げており，しかもその年代は60歳代70歳代が60％以上で同年代の人を頼りにしている様子がわかる。一方ホーム老人の場合，社会的サポーターとの連絡回数は月に一回が最も多く42.5％（91名）であり，二番目に多かったが年に2，3回の23.8％（51名）であった。社会的サポーターとしてはほとんどの人が，子供か自分の親戚をあげている。自分の親戚の年代は60歳代70歳代が多く，全体の55.9％であった。

2．孤　独　感

独居老人の場合と同様に，孤独感を測定する尺度が一次元性をもつものかどうかをチェックするために，ガットマン尺度解析法を用いた。全ての項目で分割点が3点以上のとき再現性係数が0.82となり，一次元性の高いことが確認された。従って以後，この6項目は総得点で結果を検討することにする。ここでの孤独感得点は「決して感じない」「めったに感じない」を0とし，「時々感じる」「しばしば感じる」を1として，その合計点よりなる。孤独感得点の分布はTable 1に示されている。

Table 1. 孤独感得点の分布

孤独感得点	0	1	2	3	4	5	6
割　合	30.1%	18.0%	16.4%	11.5%	9.8%	7.7%	6.6%
人　数	55	33	30	21	18	14	12

孤独感0群の人は30.1％で最も多かった。孤独感1群・2群・3群の人はいずれも10％以上で，孤独感得点の分布に散らばりがみられる。

独居老人の孤独感0群の人の割合は65.2％であった。独居老人とホーム老人の孤独感得点をx^2検定した結果，老人ホームの方が孤独感の高い人の割合が有意に多かった（$x^2=80.0$, $df=6$, $p<.001$）。

(1) 孤独感得点と性・年齢・入居年数・学歴・健康状態・社会的役割との関係

はじめに性・年齢・入居年数・学歴・健康状態・社会的役割と孤独感得点の関係を調べるためにx^2検定を行なった。その際，孤独感得点0を孤独感0群，1以上を孤独感1以上群として二分割して処理した。その結果，いずれの項目も孤独感との間に有意な関係はみられなかった。

(2) 孤独感得点と社会的サポーターとの関係

社会的サポーターの有無別による孤独感得点分布を表わしたものがTable 2である。社会的サポーターがいない場合の孤独感1以上群は89.1％（41名）で，社会的サポーターがいる場合の孤独感1以上群は73.5％（87名）である。社会的サポーターがいる方が孤独感1以上の割合は有意に少なかった（$x^2=10.8$, $df=1$, $p<.001$）。

Table 2. 社会的サポーターの有無による孤独感（老人ホーム）

社会的サポーターの有無	孤独感得点	
	0	1以上
無	10.9%(5)	89.1%(41)
有	36.5%(50)	73.5%(87)

Table 3. 社会的サポーターの有無

社会的サポーターの有無	有	無
独居老人	85.1%（354）	14.9%（62）
ホームの老人	74.9%（137）	25.1%（46）

Table 3 は独居老人とホーム老人の，社会的サポーターの有無の割合を比較したものである。独居老人の社会的サポーターがいる割合は 85.1 %（354 名），ホーム老人の方は社会的サポーターがいる割合は 74.9 %（137 名）であり両者には有意な差がみられた（x^2=9.0, df = 1，p <.005)。

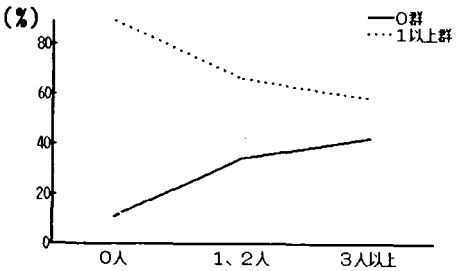

Fig.4. 社会的サポーターの人数別にみた孤独感（老人ホーム）

Fig.4 は社会的サポーターの人数別に孤独感の高低の分布を示したものである。社会的サポーターの人数は 0 人，1・2 人，3 人以上の三分割で処理した。孤独感得点は孤独感得点 0 群，1 以上群の二分割にした。x^2 検定の結果，社会的サポーターの人数が増えるにつれて孤独感得点 0 群の割合は増えていた（x^2=11.6, df = 2，p <.003)。

ホーム老人の場合，子供がいない人の割合は 43.7 %（80 名）であった。また子供の有無による孤独感の差はみられなかった（x^2=0.98, df = 1，$n.s.$)。独居老人の場合，子供がいる人の中で孤独感 1 以上群の割合は 31.4 %（94 名），いない人の場合孤独感 1 以上群の割合は 47.0 %（39 名）であり，子供がいる老人の方が孤独感 1 以上群の割合は有意に少なかった（x^2=6.92, df = 1，p <.01)。

(3) 孤独感得点と社会的サポートの要素との関係

（情動的側面・社交的側面・物質的側面・情報的側面）

孤独感得点と頼りにする側面の関係を調べた。孤独感得点は 0 群・1 以上群に分けて，4 つの各側面ごと及び 8 つの各項目ごとに被験者の得点平均を求め，2 つの群間で t 検定を行なった。その結果，有意な差が見られたのは「物やお金の貸し借りができる」の項目だけであった。この項目の 0 群の平均値は 2.86（SD 1.13），1 以上群の平均値は 2.37（SD 1.22）で，孤独感 0 群の方が平均値がやや高かった（t =2.31, df =136, p <.02)。

(4) 社会的サポーターとの連絡回数と居住地

ホーム老人の社会的サポーターとの連絡回数を週 1 回以上と月 1 回以下の二分割で調べてみ

ると週1回以上が23.4％（50名），月1回以下が76.6％（164名）であった。孤独感との関係では週1回以上の場合孤独感得点0群の割合は40％（20名），月1回以下では36.6％（60名）で，やや月1回以下の方が孤独感が高いという結果がでたが，検定の結果有意な差はみられなかった（$x^2=0.19$, $df=1$, $n.s.$）。同様に，ホーム老人の社会的サポーターとの居住地を市内と市外の二分割で調べてみると市内が56.3％（120名），市外が43.7％（93名）であった。孤独感との関係では市内の場合孤独感得点0群の割合は40％（48名），市外では34.4％（32名）で，やや市外の方が孤独感が高いという結果がでたが，これもまた連絡回数の場合と同様に検定の結果有意な差はみられなかった（$x^2=0.70$, $df=1$, $n.s.$）。

考　　察

本研究の結果，老人ホームの老人に関しても，社会的サポーターの有無，社会的サポーターの数と孤独感との間には一定の関係があることが明らかになった。これらの研究結果は，独居老人を対象とした藤原ら（1987）Arling（1976）Perlmanら（1978）やMullinsら（1987）の研究結果とも一致しており，社会的サポーターの存在や社会的サポーターが多いことが，老人の孤独感を低減する働きがあることが示されている。Lowenthal & Haven（1968）らも指摘しているが，親密な対人関係が存在することで社会的役割等の喪失体験は緩和されると推測される。

次にホームの老人と独居老人の，社会的サポーターの内容の違いについて考察する。社会的サポーターの内容に関して両者に違いがみられる。すなわち独居老人の場合，社会的サポーターとして「近所の人」（しかもほとんど同年代の人）をあげている割合が19.6％で，ホームの場合よりも親戚以外の割合が有意に高かった。Arling（1976）は，成人した子供との関係は役割の逆転という結果をもたらし，老親の側に子どもに依存しているという不快な感情を起こさせるかもしれないが，それに比べて近所の人や友人との相互作用は共通の関心や援助の相互交換によって特徴づけられており，満足感を生じさせることを指摘している。同様にWood & Robertson（1978）は，老人のモラールを維持する上で親戚関係よりも友人関係がより重要となることを見出している。すなわち独居老人にとっては血縁関係以外の社会的サポーターがいることが孤独感低減の助けになっている可能性がある。

一方ホーム老人の社会的サポーターの内容をみてみると，48.6％が子供で，36.0％が自分の親戚（多くは60歳代70歳代）であった。すなわち社会的サポーターの84.6％が血縁関係であった。また入居年数3年未満と3年以降で社会的サポーターの内容に違いはみられなかった。Lopata（1969）は50歳以上の寡婦を対象とした研究で，寡婦の71％は，努力して新しい友人を得ても，それを古くからの友人の代わりにすることはできないと思っていることを示している。このように高齢者になってからは社会的ネットワークの再構成化が難しいと推測される。

社会的サポーターとの連絡手段・連絡回数・居住地はホーム老人の孤独感に直接影響を与えなかったものの，独居老人の場合とくらべて多少異なる点が明らかになった。連絡手段については，独居老人にくらべて老人ホームの老人の場合，社会的サポーターと「直接会う」機会が少ないことが見出された。また居住地も，ホーム老人の方が独居老人にくらべて社会的サポーターが町内・市内に住んでいる割合は有意に少なかった。Cantor（1975）の，社会的に孤立しやすいと考えられる都市中心部の老人の研究では，回答者の3分の2は少なくとも毎月一回は親戚と交際していると答えている。またShanas（1979）は，独居老人は自分の子供と同じ市，

しかもその多くは子供宅から10分以内の所に住み連絡を取り合っていることを示している。同様の結果は藤原ら（1987）の調査からも明らかにされている。以上のことから，社会的サポーターが容易に直接会えるくらいの物理的距離にいることが，老人の独居を可能にしているのかもしれない。

最後に老人ホームの老人と独居老人の孤独感について考察する。老人ホームの老人と独居老人の孤独感の高さを比較すると前者の方が孤独感が高いことが明らかになった。こうした理由として前にも述べたように，社会的ネットワークの違いが考えられる。とりわけ社会的サポーターの有無とその量を両者で比較すると，老人ホームの老人の場合は社会的サポーター有りの比率が低いこと，またサポーターの数も少ないことが明らかとなったが，これら社会的サポーターの違いが孤独感に反映されている可能性がある。第2に考えられる理由として，老人ホームの老人と独居老人との生活環境や生活実態の違いがあるのかもしれない。たとえば「老人ホーム白書」（1986）によると，老人ホームの入居理由は家庭事情や経済事情の占める比率が高く，老人ホームに積極的に入居してきたわけではなく，それらが何らかの不満や孤独感という形をとって表われているのかもしれない。この点に関する究明は今後の課題である。

今後社会的ネットワークの核となるサポーターだけでなく日常接触する人との関係の質や量もあわせて検討してみる必要があるだろう。さらにまた，時間的経過の中での社会的役割の変化（たとえばホーム入居前後の変化）を考慮しながら，中高年期におけるネットワークとの比較による高年齢者の社会的ネットワークと孤独感との差異を検討する必要があると思われる。

引用文献

Arling, G. 1976 The elderly widow and her family, neighbors and friends. *Journal of Marriage and the Family*, 38, 757-767.

Cantor, M. 1975 Life space and the social support system of the inner city elderly of New York. *Gerontologist*, 15, 23-27.

Creecy, R.F., Berg, W.E. & Wright, R. 1985 Loneliness among the elderly: A causal approach. *Journal of Gerontology*, 40, 487-493.

藤原武弘・来嶋和美・神山貴弥・黒川正流　1987　独居老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究，広島大学総合科学部紀要Ⅲ，11，43-52.

Kahn, R.L. & T.C.Antonucci. 1981 Convoys of Social Support: A Life-Course Approach. In Kiesler, S.B.et.al. (eds.). *Aging: Social Change*. Academic Press, 383-405.

金子　勇　1987　都市高齢者のネットワーク構造　社会学評論，38，336-350.

古谷野亘・柴田　博・中里克治・芳賀　博・須山靖男　1987　地域老人における活動能力の測定，日本公衛誌，3，109-114.

工藤　力・西川正之　1983　孤独感に関する研究（Ⅰ）－孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討－，実験社会心理学研究，22，99-108.

工藤　力・長田久雄・下村陽一　1984　高齢者の孤独に関する因子分析的研究，老年社会学，6，167-185.

Lopata, H.Z. 1969 Loneliness: Forms and components. *Social Problems*, 17, 248-261.

Lowenthal, M., & Haven, C. 1968 Interaction and adaptation: Intimacy as a critical variables. *American Sociological Review*. 33, 20-30.

Mullins, L.C,. Johnson, D.P. & Anderson, L. 1987 Loneliness of the elderly: The impact of

family and friends. Special issue: Loneliness: Theory, research, and applications. *Journal of Social Behavior & Personality*, 2, 225-238.

西下彰俊　1987　高齢女性の社会的ネットワーク　社会老年学, 26, 43-53.

長田久雄・原　慶子・荻原悦雄・井上勝也　1981　老人の孤独に関する心理学研究老年社会科学, 3, 114-124.

Peplau, L.A. & Perlman, D. 1982 *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy.* New York: John Wiley & Sons.

Perlman,D., Gerson, A.C. & Spinner, Barry 1978 Loneliness among senior citizens: An empirical report, *Essence*, 2, 239-248.

Rosow, I. 1974 *Socialization to old age.* Berkeley: University of Calefornia Press.

Shanas, E. 1979 Social myth as hypothesis: The case of the family relations of old people. *Gerontologist*, 19, 3-10.

総務庁長官官房老人対策室　1987　老人の生活と意識　中央法規出版

Wood, V., & Robertson, J. 1987 Friendship and kinship interaction: Differential effect on the morale of the elderly. *Journal of Marriage and the Family*, 40, 367-375.

全国社会福祉協議会老人福祉施設協議会　1986　老人ホーム白書　全国社会福祉協議会